

巻頭エッセイ

自然災害と鹿児島

鹿児島大学生涯学習教育研究センター長
鹿児島大学農学部教授 下川悦郎

鹿児島県では、自然災害が毎年のように頻繁に発生する。それも、豪雨災害、風害、潮害、火山災害、地震災害などなど、多様である。自然災害による死者・不明者数は第二次大戦後でも1200人を超える。

近年で最も大きな災害は、1938年の肝属豪雨災害である。10月14、15日台風接近に伴って大隅地方は豪雨に見舞われ、田代、内之浦、高山では総雨量が400mm以上を記録した。山地では多数の山崩れ・土石流が発生する一方、平地では河川が増水氾濫し、高山町（現肝付町）を中心に大きな被害が発生した。死者・不明者数は435人を数えた。

戦後も自然災害は繰り返し発生している。なかでも、1949年鹿児島県はデラ、フエイ、ジュディスの3大台風襲われ、風水害や土砂災害が相次ぎ、202人が犠牲になった。最近の自然災害で最も大きなものは、13年前まで遡るが、1993年の災害である。この年は6月の入梅から台風13号が襲った9月3日までの間、鹿児島県は幾度となく豪雨に見舞われた。その間の雨量は年降水量をも上回る多量のものであった。これによって、鹿児島県のあちこちで災害が相次ぎ、死者・不明者数は122人になった。そのほとんどは土砂災害によるものである。第二次大戦後では1949年の災害に次ぐ大きな災害となった。

自然災害は島嶼地域にも悲惨な被害をもたらしてきた。そのなかで、本年10月20日に発生した災害は最大級のものといえよう。秋雨前線の停滞に伴って奄美地方はかつてない記録的豪雨に見舞われた。18日の降り始めから21日までの総雨量は奄美大島の多いところで800mmを超え、南部の奄美市住用町では3時間雨量が354mmを記録した。この豪雨で各所で河川が増水氾濫、斜面崩壊、土石流による災害が発生し、3人が犠牲になった。農水産業や商工業、観光業、医療・福祉施設、公共施設などへの被害も甚大である。災害後1月が過ぎた現在も災害の傷跡は癒えていない。20年前の1990年9月18日、台風19号の通過に伴って奄美は豪雨に見舞われ、南部に位置する瀬戸内町古仁屋地区で土石流が発生し、11人の人命を奪った。島嶼地域の

自然災害としては、多くの犠牲者を出した災害として最大級の自然災害である。

県内には桜島や霧島をはじめ活火山が多数分布する。火山災害も鹿児島県に悲惨な被害をもたらしてきた。なかでも1914年の桜島火山の大正噴火はわが国が20世紀に経験した最大の火山災害とされ、桜島島内はもとより周辺地域に大きな被害をもたらした。島内では30人が噴火の犠牲になり、島民の3分2にあたる約2万人（このなかには桜島東側の大隅半島の住民も含まれている）が移住を余儀なくされた。その多くは県内に移住したが、遠くは朝鮮全羅北海方面へ移住した家族もある。移住先での生活は困難を極めたという。降灰や軽石に厚く覆われた大隅半島では噴火後雨のたびに土石流や河川の氾濫による災害が相次ぎ8人が犠牲になった。また、降灰や軽石はこの地域の主要産業である農林水産業に壊滅的損害を与えた。降灰や軽石に覆われた農地の復旧は容易ではなく、多くの困難と年月を費やした。桜島は、1471—76年（文明噴火）、1779年（安永噴火）にも軽石放出と溶岩流出を伴う大噴火をしており、大正噴火と併せ3大噴火といわれる。記録は少ないが、文明噴火、安永噴火時にも被害は島内だけでなく広く火山の周辺域に及んだという。

地震による災害も発生している。大正大噴火に伴って発生した地震は鹿児島市で震度6の烈震となり、がけ崩れや建物の倒壊等で犠牲者は29人を数えた。最近の地震災害の事例は、1997年の鹿児島県北西部地震による災害である。震源地近くでは5強、6弱の震度となり、家屋、公共施設関係の被害が発生する一方、山地では山崩れや土石流の発生が相次いだ。幸い犠牲者は出なかった。

吹上浜は日本三大砂丘の一つとして知られている砂丘である。この砂丘は1673～1680年（延宝年間）の大火災で海岸林が焼き尽くされ、その後砂浜沿いの住民は長年にわたって飛砂害や塩害による被害に苦しんだとされる。

鹿児島県はシラスに広く覆われ、また山岳地が多くを占め、農地の生産力は低い土地柄である。そうした厳しい自

然条件に自然災害による被害が加わり、人々の日々の暮らしは困難と苦労を強いられたと考えられよう。海外移住者の多さは沖縄県について2番目である。それでも、人々は、厳しい自然と正面から向きあい、自然災害を克服してきたのではないか。たとえば、農地の開発は氾濫の被害を受けやすい大きな河川の河川敷を避け、氾濫の被害を受けにくい小河川や谷沢で行われた。桜島大正噴火による火山災害においては、前兆現象の把握や、噴火後に発生する土石流災害および河川氾濫による災害の防止に安永噴火の経験が生かされたとされている。厚い降灰や軽石で大きく低下した農地を、農民は、建設用の重機がなかった時代に牛馬を使って取り除き、その生産力を回復させた。吹上浜では、

大火災後の飛砂害や塩害による被害を防止するために、藩政時代から今日まで息の長い海岸防災林の造成工事が行われている。白砂青松の海岸林は人々の汗と苦労によって作り出されたものである。

少し飛躍になるかも知れないが、こうした経験や苦労の積み重ねは鹿児島県民の暮らしや考え方に影響を与えたといえるのではないだろうか。明治維新は、ともすると士族それもごく一部の人の役割だけが強調されるが、厳しい自然条件と自然災害を克服してきた民の底支えがなければ到底成しえなかったといえるのではないだろうか。こうした民の力を評価をすることも、生涯学習の大きな課題であろう。